



不利益行為における自他動詞の選択について：配 慮表現としての機能を中心に

著者	リナ アリ
雑誌名	日本語コミュニケーション研究論集
巻	8
ページ	36-43
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159063

不利益行為における自他動詞の選択について

——配慮表現としての機能を中心に——

リナ・アリ（カイロ大学）

要 旨

本研究では、不利益行為に焦点を当て、配慮表現の観点から日本語とアラビア語の自他動詞の選択の相違点を探り、両言語間の相違がアラビア語⁽¹⁾を母語とする日本語学習者にどのように影響するのかということを考察した。その結果、日本語においては他動詞がより丁寧であるのに対し、アラビア語は自動詞がより丁寧であることが分かった。そして、両言語間の相違は、学習者の自他の選択の習得を困難とする大きな要因であることも明らかとなった。

キーワード：不利益行為、対人配慮、責任感、意図性、語用論的転移

1. 研究背景と目的

日本語学習者の自他動詞の選択を取りあげた従来の先行研究において、学習者の母語を問わず自他の使い分けの困難性について多くの指摘がなされている。しかし、文化は言語に大きく反映すると思われるため、日本語学習者にとって自他の習得を困難とする共通の要因もあれば、学習者の母語文化によって生じる困難性もあると考えられる。本研究では語用論⁽²⁾における配慮表現の観点から日本語とアラビア語の自他の選択の違いを考察し、両言語においてこれらの表現がどのように使用されているかを明らかにする。両言語の違いを明らかにした上で、アラビア語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）の自他の選択実態及び、学習者の問題点を解明することを目的とする。

2. 問題の所在

アラビア語を母語とする上級レベルの日本語学習者でも日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて、自他の不適切な表現選択を行なうことがしばしば見られる。例えば、以下は実際に日本人の先生に本を借りた学習者が用いた発話である。

1. 先生、すみませんが本が汚れてしまいました。

学習者の例文は文法的に誤用とは言えないが、日本語母語話者同士であれば、あえて他動詞を用いるのが適切であるということが3名の日本語母語話者を対象としたインタビュー調査で明らかとなった。なぜなら、自動詞を用いると無責任な印象を与え、相手への思いやりが欠けている発話となるからである。このような学習者の日本語らしくない不適切な発話が生じる原因として、目標言語の背景にある文化や価値観の知識が不十分であること、学習者の母語で同様の実態を言語化する際、目標言語とは異なるメカニズムが働いていることが考えられる。従って、配慮表現の観点から日本語とアラビア語の自他の選択のメカニズムを解明する意義があると考えられる。

牧原（2012）は、「皿が落ちて割れてしまったんです。」という発話例は、「やや無責任な感じがするように思われる」と指摘している。これに対して、アラビア語において、自動詞で同様の発話をするこ

とが多い。なぜなら、アラビア語の「ana kasart eltaba`」(皿を壊した)は、話者が意図的に相手に不利益をもたらしたという印象を与えてしまうからだと思う。

このように、日本語とアラビア語の自他の選択において大きな違いが存在することが分かる。小林(1996)は、学習者の母語と日本語との不一致が大きいほど、習得は困難となることを指摘している。筆者も、両言語間の相違が、学習者の自他の選択の習得をさらに困難とする原因の1つだと考える。

3. 先行研究

本研究では、配慮表現としての自他の選択に焦点を当てるため、まずこれらの用語を以下で定義したい。

配慮表現とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係になるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」(山岡・牧原・小野 2018)である。

また、自他の選択とは、「ある出来事を描写する際に、動作主を前景化するか背景化するかという選択」で、「それを考察することは、把握した事態をどのように表出すると対人配慮の表現となるのかということであり、話者の主観性をどのように文の生成に関与させるか」(牧原 2016)ということである。

また、自他の選択は、行為者による行為に視点をおくのか、変化した対象に視点をおいて表現するのかを考慮に入れて言語形式を決定することだが、学習者にとってはこの決定が困難であると指摘されている(小林 1996)。

自他の選択について様々な観点から研究がなされ、日本語学習者を対象とした研究も数多く行われてきた[守屋(1994)、伊藤(2012)、牧原(2016)、小林・直井(1996)、中石(2004)]ものの、語用論における配慮表現の観点からアラビア語を母語とする日本語学習者による自他の不適切な配慮表現の選択を対象とした研究は管見の限りない。従って、学習者が適切な配慮表現を使用できるか否か、学習者の問題点を明らかにすることが重要である。

4. 研究方法

他者に不利益をもたらすことは、Leech(1983)のポライトネスの原則の気配りの原則(b)「他者の利益を最大限にせよ」に違反するため、配慮表現の使用が必要不可欠である(リナ 2016)。従って、本研究では「不利益をもたらす行為」に着目して配慮表現の使用実態を観察する。また、本調査では「不利益を与えた側」と「不利益を受けた側」の双方に自他表現の適切性について判断してもらうことで、オリジナリティを生み出す新たな調査方法を実地したい。また、答えを限定する選択式のアンケート調査ではなく、より視野を広げ被調査者に自由に答えてもらう調査方法を実施する。つまり、事前に有対・無対自他動詞のどちらかに焦点を当てるのではなく、被調査者がこのような場面に置かれた際、どのように謝りたいのか、被調査者の本意をより広い範囲で把握したい。

4.1. 調査対象者

本研究では、4つの調査を実施したい。調査実施期間は、2017年9月から2019年1月までである。まず不利益を与えた側の調査として、①談話完成テスト調査(DCT)及び、②フォローアップインタビュー調査を実施する。

具体的に、カイロ大学日本語日本文学部の初級レベルの日本語学習者26名を対象に自由記述式のDCT

調査を行なう。DCT 調査によって、学習者が適切だと考える応答を書いてもらう。そして、同様の DCT 調査をアラビア語に翻訳して、日本語学習経験のないアラビア語母語話者 10 名（男性 5 名・女性 5 名）を対象に実施する。

DCT 調査を行なった上で、フォローアップインタビュー調査を行う理由は、被調査者がなぜそのように表現の選択を行なったのか、何を基準にして相手に対する配慮が伝わると思うのかを明らかにできるからである。また、学習者にとって配慮表現における自他の使い分けを困難とする要因を明らかにするためである。

次に、不利益を受けた側の調査として、①エジプトで働いている日本語母語話者 8 名（男性 4 名・女性 4 名）、②日本語学習経験のないアラビア語母語話者 8 名（男性 4 名・女性 4 名）を対象にインタビュー調査を実施する。インタビュー調査では、日本語学習者が DCT 調査で産出した日本語の例文を日本語母語話者に提示して、このように言われたらどう感じるかを問うアンケート調査を実施する。日本語母語話者の調査を行うことにより、学習者に対する母語話者の評価と、日本語母語話者自身が自他の選択についてどのように考えているのかも把握できると考える。一方、日本語学習経験のないアラビア語母語話を対象に調査を行うことにより、不利益を与える側が適切だと考える表現は、実際受け手にとって適切なのか、不利益を与える側と不利益を受ける側の双方の主観性を明らかにする。

4.2. 調査場面

調査場面は謝罪発話に限定し、相手に不利益を与えた 3 つの場面において、被調査者がどう謝罪するのかを観察する。その理由は、「謝罪の発話行為が他の発話行為よりも、より高いポライトネスを示す必要が生じるため、配慮表現としての動詞の自他の用法の違いが明確に現れる」（牧原 2016）と考えられるからである。具体的な調査場面は以下のとおりである。

- I 大学の先生に借りた本に水をこぼしたが、本を返すときどう謝るのか。
- II 友人の車を借りてぶつけたが、車を返すときどう謝るのか。
- III 友人に借りたカセットラジオを壊したが、友人にどう謝るのか。

5. 調査結果と考察

以下では、調査結果を、不利益を与えた側と不利益を受けた側の 2 つに分けて、考察を行う。

5.1. 不利益を与えた側

5.1.1. アラビア語母語話者

5.1.1.1. DCT 調査結果

アラビア語母語話者を対象に行なった DCT 調査結果を以下の表 1 で示す。

表 1. アラビア語母語話者の調査結果

場面	自動詞	他動詞
I 車	9	1
II 本	9	1
III ラジオ	9	1

表に示してあるように不利益を与えた場合、性差や場面・内容を問わず、他動詞より自動詞が多用されている傾向があることが分かる。

どの言語でも他人に不利益を与えた際、配慮を示す必要があるという事実から考えると、アラビア語は他動詞より自動詞の方がより丁寧であることが予想できる。

日本語では、非意図的に相手に不利益を与えた際、自動詞より他動詞の方がより丁寧である(守屋 1994、牧原 2016) が、上記の結果から考えるとアラビア語は日本語とは異なり、無意図的に相手に不利益を与えた際他動詞より自動詞の方がより丁寧であると言える。

以下は、DCT 調査で得られたアラビア語母語話者による例文である。

2. maālsh ana asfa gdan elārabya etkhabatet .bgd makansh asdy.

(ごめんなさい。本当にすみません。車がぶつかった。わざとじゃなかった。)

3. Elkaset baz fag2a maārfsh leh.ana asfa gdan.

(なぜか分からないんですが、急にカセットラジオが動かなくなった。本当にすみません)

4. Doctor ana asef bs elketab we`ā āaleh maya makansh asdy. Hashtry wahed gdeed le ḥadretak.

(先生すみません、本に水がこぼれた。わざとじゃなかった。新しいのを買ってあげます。)

5. ana asef ya doctor elketab we`ā āaleh maya ghsb anny . da ketab gdeed gbto bdalo.

(すみません先生、ついに本に水が溢れた。これが代わりに買った新しい本です。)

6. ana asfa dgan bgd. elketab we`ā āaleh maya. Bs ana gbt wahed gedeed le ḥadretak.

本当にすみません。本に水が溢れた。しかし、先生に新しいのを買った。

上記の例 2～例 6 を観察すると、他動詞が全く使用されていないことが分かる。しかし、例 4 では、被調査者が弁償を提案し、例 5 と例 6 では 2 名の被調査者が代わりに新しい本を購入し、先生に渡ししながら、謝罪の発話を産出した。このことから、被調査者が不利益を与えたことに対して、責任を感じていることが明らかである。つまり、自分自身が責任者であることを認めているものの、他動詞ではなく自動詞を使用し事態を言及している。このことから、アラビア語の自動詞は、日本語の自動詞のような「無責任」という印象を与えないと同時に、他動詞は責任感及び対人配慮の機能が備えていないことも予想される。

5.1.1.2. フォローアップインタビュー調査結果

フォローアップインタビュー調査では次のような結果が得られた。車の場面において、「相手にさらにショックを与えないように、他動詞を用いない。」という対人配慮の目的もあれば、「他動詞を使うと、完全に自分の責任になる。」という責任回避の目的でも自動詞が使用されることが分かる。また、本の場面においても、「他動詞を用いると意図的にそうしたことになるので、非丁寧だと思う」、「自動詞の方が相手に優しい。」など対人配慮の目的で自動詞が多用される結果が得られた。また、上記の例 5 と例 6 を産出した被調査が「なぜ先生に新しい本を買ってあげると思ったのか」という質問に対して、次のように答えた。「先生の本に水が溢れてことは、自分の不注意なので自分に責任があり、弁償することが当たり前だからである」、「先生にそのまま本を絶対渡せないから」などと述べた。つまり、被調査者が不利益を与えたことは、申し訳なく思っているものの、自動詞で事態を言及した。筆者がこ

のように答えられた際、なぜ「水をこぼした」とは言わなかったのかと質問した。「水をこぼした」だと無責任な感じがすると同時に、意図的に不利益を与えたというニュアンスもあるため、不適切で先生に対して失礼であると被調査が答えた。要するに、他動詞の選択は、配慮表現として相応しくないことを伺える。一方、自動詞は対人配慮の表現であるため、より丁寧であることが示唆された。しかし、上記の回答から自動詞を用いることは、必ずしもイコール責任を感じているというわけではなく、責任を認めていない場合でも用いられる場合もあることが分かる。このことから、アラビア語では自分が責任者であれ、無責任者であれ、自動詞が使用される傾向が高いことが明らかである。

5.1.2. 日本語学習者

5.1.2.1. DCT 調査結果

日本語学習者を対象に行った DCT 調査結果を以下の表 2 で示す。

表 2. 日本語学習者の調査結果

場面	自動詞	他動詞
I 車	26	0
II 本	24	2
III ラジオ	23	3

上記の表 2 から、場面内容を問わず学習者もアラビア語母語話者と同様に、他動詞より自動詞を多用する傾向が高いことが分かる。場面内容の差は大きくないが、相手への不利益が最も大きいと考えられる車の場面において、自動詞のみ使用されている。また、相手が先生である「本」の場面でも 8 割以上の学習者が自動詞を用いて、謝罪発話を産出した。つまり、高いポライトネスを示す必要のある相手に対しても、自動詞が丁寧だと見なされていることが想定できる。

以下は、学習者が自動詞を用いて産出した日本語の例文である。

7. 先生、すみません。その本が汚れてしまいました。ごめんなさい。
8. すみません。先生の本はちょっと汚れてしまいました。でも新しい本を買うはずです。ごめんなさい。
9. 申し訳ありません。ラジオは壊れてしまいました。ですが、直します。
10. ごめんなさい。この本はよごれました。あなたに新しい本をかいますか。
11. あなたに借りたラジオが壊れたんです。それはごめんなさい。でもすぐ直しますから。

上記の例 7～例 11 を見ると、学習者が「直します」、「新しい本を買います」など弁償を表す表現を用いて、相手に与えた不利益行為によって生じた好ましくない結果を改善しようとしていると言える。要するに、責任感があるのにも関わらず、被害行為を自動詞で言及している。一方、他動詞が用いられた例は自動詞と比較すると非常に少ない傾向が見られた。例えば、以下のような例文が挙げられる。

12. ごめんなさい、私が借りた本は汚れてしまいました。同じ本を買います。
13. ラジオがついに壊しました。直しにうちへもってかえりませんか。

以上から、学習者も母語から強く影響を受けているため、日本語でも他動詞より、自動詞の方が丁寧であると思込んでいることが言える。

5.1.2.2. フォローアップインタビュー調査結果

フォローアップインタビュー調査では、学習者が他動詞をあまり用いない理由として、「相手に不快感

を与えないため」、「他動詞は意図的に被害を与えた」と解釈されるため、あえて用いない」という回答が多かった。つまり、学習者は母語の対人的配慮のメカニズムに従って考えることが、日本語の不適切な自他の選択要因の1つになっていることが分かる。

また、他動詞を用いた学習者のうち2名のみが、「他動詞の方が丁寧である」と述べ、残りは自他の混同が原因で、間違えて他動詞を選択したことが見られた。しかし、本研究では自他の混同が分析対象外であるため、詳しく論じない。

このように、初級レベルの日本語学習者には、語用論的転移⁽⁹⁾が生じていることが明らかである。

5.2. 不利益を受けた側の調査結果

5.2.1. 日本語母語話者

日本語母語話者を対象に行なったインタビュー調査では、次のような結果が得られた。8名のうち、6名が、学習者が産出した自動詞の例文に対して、「壊れたんじゃなくて、壊したでしょう」や、「無責任な感じがする」という発言をした。また、「完全に自分の責任でない場合でも、他動詞を使ってほしいのですが、そのとき文末に「かもしれない」、「みたい」、「～てしまう」で表すのが適切である」という回答も得た。つまり、不利益を受けた人は、不利益を与えた人にとって被害が起きた原因が不明な場合でも、他動詞プラス蓋然性表現の組み合わせで、謝罪された方が適切であると考ええる。

また、3名の母語話者から次のような回答もあった。「不利益を受けた際、まず謝罪のことばが先に言われたい」という。つまり、他動詞で該当行為を伝達されても謝罪がなければ、配慮が足りない発話だと見なされるということである。また、なぜ不利益行為をもたされたのか詳しく説明してもらいたいという回答もあった。以上のことから、日本語の自他の選択において、意味公式の出現順位が対人配慮を決定する要因の1つだと言える。筆者は、インタビューでそのように言われた際、被調査者に次の質問をした。「このような場面に置かれた際、どのような順番で談話が展開されたら、理想的な謝罪だと考えるのか」を聞いてみたところ、謝罪、次に不利益行為の伝達で、最後に詳しい理由説明という順番で配慮が伝わるという回答を得た。要するに、意味公式の出現順位で示すと「謝罪+結論+理由説明」のパターンが理想的な謝罪発話である。

被調査者のうち女性2名が、場面内容によって詳しい理由説明があれば、自動詞でも適切だと考える場合もあると回答した。例えば、ラジオの場面では急にラジオが動かなくなったと想定できるため、必ずしも相手の不注意ではないことも想像でき、詳しい理由説明で状況を判断できると述べた。つまり、自他の選択は、様々な要因によって判断されるが、個人差もその要因の1つだと言える。

日本語母語話者の調査結果から、不利益を受けた側が表現選択に視点を置くことが明らかとなった。また、他動詞が使われたからといって、必ずしも適切な発話となり、相手に配慮が伝わるわけではなく、謝罪がなければ、言い訳に聞こえるため、好ましくないという結果が得られた。このことから、他者に不利益を与える行為において日本語では謝罪と他動詞プラス「～てしまう」、蓋然性表現との共起が重要であることも示唆された。つまり、日本語でも「ラジオを壊した」という発話は、意図的に不利益をもたらした印象を与えるのに対して、「申し訳ありませんが、ラジオを壊してしまいました」の場合、不利益をもたらしたことに對して申し訳なく思っていることや、結果が望ましくないことも聴者に伝わる発話となる。

5.2.2 アラビア語母語話者

アラビア語母語話者を対象に行ったインタビュー調査では、日本語とは異なる大きな点として、男女

の差が観察されたことが挙げられる。従って、調査結果を男女別に分けて、考察したい。男性からは、次のような回答が得られた。「被害が起きたことは変えられない事実であるため、表現方法はそこまで気にしない」や、「伝達方法より、出来事に視点を置くから、表現はどうでもいい。」、「出来事に注意を向けるため、自動詞でも他動詞でも変わらない」などである。このことから、男性同士の場合言葉よりも、イベントに注意が向けられることが特徴付けられる。つまり、男性が不利益行為を与えられた際、その行為の伝達方法及び、表現選択について深く考えない。これに対して、女性からは次のような回答が得られた。「他動詞は意図的に不利益を与えられたと聞こえるため、さらにショックを感じる」、「他動詞だと失礼だと思う。」、「自動詞の方が思いやりが伝わる」などである。このように女性は男性とは異なり、表現選択に注意を向けることが分かる。

上記の結果から、不利益を与えた側は常に「自動詞」の方が適切だと考えるものの、不利益を受けた側にとって必ずしも自動詞が良いとは限らず、性差の違いによって相手の表現選択より、変化した対象に焦点を当てる場合もあることが分かる。また、同じく男性でも自分が不利益を与えたのと、不利益を受けたのとでは、事態を把握するメカニズムが異なる。

6. 結論

不利益行為によって生じるFTA軽減のストラテジーとして日本語においては、他動詞が「～てしまう」や蓋然性表現との共起によって、発話者が自分自身が責任者であり、申し訳なく思っていることを聴者に伝えることで配慮を示す。また、日本語の自動詞には「無責任」というニュアンスがあるため、文脈によって非丁寧な表現となる場合が多い。一方、アラビア語において、自動詞が「msh asdy, ghasb any」（わざとじゃない、つい）との共起によって、意図的に不利益行為を起こしていないという発話者の主観性が聴者に伝わるとともに、聴者への配慮も示されるため、対人配慮の機能を備えていることが明らかとなった。また、アラビア語の他動詞には「意図的に」という印象があるため、謝罪発話において用いられることが不適切であり、聴者への配慮が伝わらない危険性が生じる。また、アラビア語には性差の違いがあり、男性の場合変化した対象に視点を置くのに対して、女性は行為者による行為に視点を置くことが明らかとなった。

以上のことから、日本語とアラビア語の自他の選択が大きく異なることが明らかである。このような両言語の異なりが、学習者にとって配慮表現の観点から自他の使い分けを困難とする大きな要因となっていることが明らかとなった。

7. まとめと今後の課題

本研究において、日本語母語話者は学習者が産出した謝罪発話に対して、否定的に評価をしていることが観察された。このように優しく丁寧に言ったつもりでも、必ずしも相手にそう伝わるとは限らない。従って、相手にどう伝わるかを考えた言葉の使い方を学ぶことも必要不可欠である。

本調査結果では、一定の傾向が見られたが調査対象者が少人数であったため、参考程度にしか言えない。従って、今後の課題として被調査者の人数を増やし本研究の結果を再確認する。また、エジプトにおいて、性差の違いがどのように自他の選択に影響するのかについてさらなる考察が重要だと思われる。

本研究では、初級レベルの日本語学習者に語用論的転移が生じていることが明らかとなったが、中上級レベルでは同様の傾向が見られるのか否かについて調査して明らかにしたい。また、日本語学習者が日本語母語話者と良好な人間関係を築くことができるように、学習者の問題を解決するための指導法を

提供することこそが今後の大きな課題となる。

注

- (1) アラビア語は、フスハーとアーンミーヤに大別される。フスハーは、しっかりとした文法体系に基づいた読み書きの正則アラビア語であり、アーンミーヤは人々が私的な生活空間で用いる民衆言語で、文法的にきちんと説明することが困難な場合がある。本研究では扱うアラビア語は、エジプト方言アラビア語であり、エジプトにおいて日常生活で使われている口語のアーンミーヤである。
- (2) 語用論とは、「言語学の諸部門のなかで、発話の効力が発生するメカニズムを探究する部門である」(山岡・牧原・小野 2010:11)
- (3) 語用論的転移とは、第2言語で発話行為を行う際、母語の社会言語学的能力を転移することを指す(近藤 2009:76)。

参考文献

- 伊藤秀明 (2012) 「学習者は「対のある自他動詞」をどのように使っているか —中国人日本語学習者の中級から超級に注目して—」 国際日本研究専攻 筑波大学 *pp. 43-52*
- 小野正樹・李奇楠編 (2016) 『言語の主観性—認知とポライトネスの接点—』 くろしお出版
- 近藤佐智子 (2009) 「中間言語語用論と英語教育」 『上智短期大学紀要』 29: 73-89.
- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現・日本語学習者の習得状況」『文芸言語研究言語 篇』29、41-56、筑波大学文芸・言語学系
- 小林典子・直井恵理子(1996)「相対自・他動詞の習得は可能か・スペイン語話者の場合」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』11、83-98、筑波大学留学生教育センター
- 中石ゆうこ (2004) 「対のある自他動詞に関するビデオ教材の作成と検討」『日本語教育方法研究会誌』11 くろしお出版 (2)、36-37、日本語教育方法研究会
- 牧原 (2012) 「日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー」群馬大学国際教育・研究センター論集 第11号 1—14頁
- 守屋三千代 (1994) 「日本語の自動詞・他動詞の選択条件・習得状況の分析を参考に」『講座日本語教育』29、151-165、早稲田大学日本語教育研究センター
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院
- リナ アリ (2015) 「エジプト方言アラビア語の断り発話に見られる配慮表現について—日本語と対照して—」『アラブ世界における日本研究の現状』カイロ大学日本語日本文学部紀要
- リナ アリ (2016) 「日本語とアラビア語の断り発話を正当化するメカニズムについて—異文化間語用論と配慮表現の観点から—」筑波大学人文社会科学国際日本研究専攻博士論文
- Leech, G.(1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.

(リナ・アリ、カイロ大学日本語日本文学部上級講師、linaali59@hotmail.com)